

## 速報

多良間島におけるアカヒゲの秋期の渡り<sup>\*1</sup>関 伸一<sup>\*2</sup>

キーワード：アカヒゲ，渡り，多良間島

## I. はじめに

アカヒゲ *Erithacus komadori* は南西諸島と男女群島でのみ繁殖する日本の固有種である。その生息域が限られていること、生息地の森林が開発や移入動物などの人為的影響を受けやすい状態にあることから、国の天然記念物および国内希少野生動物植物種に指定され、日本版レッドデータブックでは亜種により絶滅危惧IB類または絶滅危惧II類に分類されている（環境省，2002）。アカヒゲは2亜種（川路・樋口，1989）あるいは3亜種（日本鳥学会，2000）に分類され、沖縄本島に生息する亜種ホントウアカヒゲ *E. k. namiyei* 個体群と亜種アカヒゲ *E. k. komadori* の奄美諸島の個体群とは留鳥であるとされるが（日本鳥学会，2000）、亜種アカヒゲのトカラ列島で繁殖する個体群は夏鳥であることが知られている（関，2001）。渡り鳥の保全には繁殖地だけでなく渡りの中継地や越冬地の保護も重要となるが（永田，1999）、トカラ列島個体群の渡りの経路や越冬地についてはわずかな報告しかない（川路・樋口，1989）。

宮古列島では、3～4月および10～11月の渡りの時期に限ってアカヒゲ観察記録が複数あり（久貝ほか，2000）、アカヒゲの渡りの経路にあたると思われる。しかし、それらの個体の分布状況や亜種分類については明らかにされていない。そこで、本研究では、立地条件から渡り途中の個体が観察される確率が高いと推測された宮古列島多良間島において、アカヒゲの生息確認と捕獲、計測を行ったので報告する。

## II. 調査地および方法

調査は沖縄県多良間村多良間島で、2003年10月8日～14日に行った（図-1）。多良間島は宮古島の西67km、石垣島の北東35kmに位置し、面積19.7km<sup>2</sup>、周囲26.2km、標高32mの隆起珊瑚礁の島である（日本離島センター，1998）。このような地理的条件に加えて、アカヒゲの主な採餌環境である常緑広葉樹林が島内の一部のみに分布しているため、渡り途中の個体の確認が比較的容易であると推測された。

アカヒゲの生息確認調査では、任意に選定した42の観察点において、まず約10分間定点観察を行い、次にアカヒゲのさえずりを1分間再生して鳴き返しの有無を記録した。観察点は島内各地の森林（常緑広葉樹植栽林・リュウキュウマツ林・モクマオウ林）周辺とし、さえずりの再生にはトカラ列島中之島でMD録音した音声を用いた。一観察点で複数のアカヒゲが確認された場合は、それぞれの確認地点を別に記録した。

次に、アカヒゲが多く観察された地域で、環境省および沖縄県教育庁の許可を得て捕獲を行った。捕獲は10月9日～13日の期間中、午前5時～午前10時と午後4時～午後7時にかすみ網を用いて行い、捕獲個体は標識、計測後に放鳥した。

## III. 結果

調査期間中にアカヒゲが確認された地点は14地点で（図-1）、そのすべてが多良間島北部の常緑広葉樹植林地域とその周辺に限られた。さえずりが聞かれたのは早期だけであったが、生息が確認された地点では日中も地鳴きやMD再生音への鳴き返しが確認された。

調査期間中に捕獲された個体は雄5、雌2の計7個体で、計測値は表-2のとおりであった。捕獲個体は翼長が長く、背面・腹部は淡色で、雄では前額黒帯幅が広く脇腹に黒色部分があること（図-2 a）、雌では腹部に鱗模様が認められたこと（図-2 b）から、形態的には亜種アカヒゲに類似していた。しかし、捕獲個体数が少なく、捕獲個体の多くが第1回冬羽であったため、いずれの計測値でも川路・樋口（1989）に記載されているホントウアカヒゲの計測値との間に有意な差は認められなかった。

## IV. 考察

アカヒゲの確認数がとりわけ多かったのは御獄および墓地周辺のように、下層植生の伐採が行われていない常緑広葉樹林であった。公園や人家周辺の下層植生の少ない常緑広葉樹林でも2カ所でアカヒゲが確認されたが、リュウキュウマツ林やモクマオウ林

<sup>\*1</sup> Seki, S-I : Observation records of Ryukyu Robin, *Erithacus komadori*, in Taramajima Is. during the autumn migration period

<sup>\*2</sup> 森林総合研究所九州支所 Kyushu Res. Center, For. Forest Prod. Res. Inst., Kumamoto 860-0862

では全く観察されなかった。下層植生の多い常緑広葉樹林では他の森林に比べて地表の落葉層が厚く土壌が乾燥しておらず、表層の土壌動物が多く観察されるなど、アカヒゲの採餌に適した環境であったためと考えられた。また、標識個体のうち3個体はそれぞれ72, 24, 10時間後にほぼ同じ地点で再捕獲され、別の1個体は80時間にわたって捕獲地点付近で目撃された。したがって、多良間島で観察されるアカヒゲは、すべてが短期間で通過していくわけではなく、数日以上滞在する個体もいることが明らかになった。さらに、アカヒゲが観察された地域ではカラスバト *Columba janthina* やキンバト *Chalcophaps indica* などの日本版レッドリスト掲載種も頻繁に観察された。以上のことから、多良間島に残る常緑広葉樹林は、ごく小面積であるにもかかわらずアカヒゲの渡りの中継地や希少鳥類の生息地として重要な役割を果たしていると考えられた。

一方、多良間島で確認されたアカヒゲを捕獲、計測することにより、これらの個体が亜種アカヒゲと非常に類似した形態を持つことが明らかになった。しかし、アカヒゲの亜種とその分布については議論があり(日本鳥学会, 2000)、本研究の結果だけで多良間島で確認されたアカヒゲの繁殖地を特定するのは困難であった。今後は、より多くの個体で標識再捕獲を行って直接的な渡りの追跡を試みるとともに、分子生物学的な手法を用いた繁殖地推定も検討する必要があると考えられた。

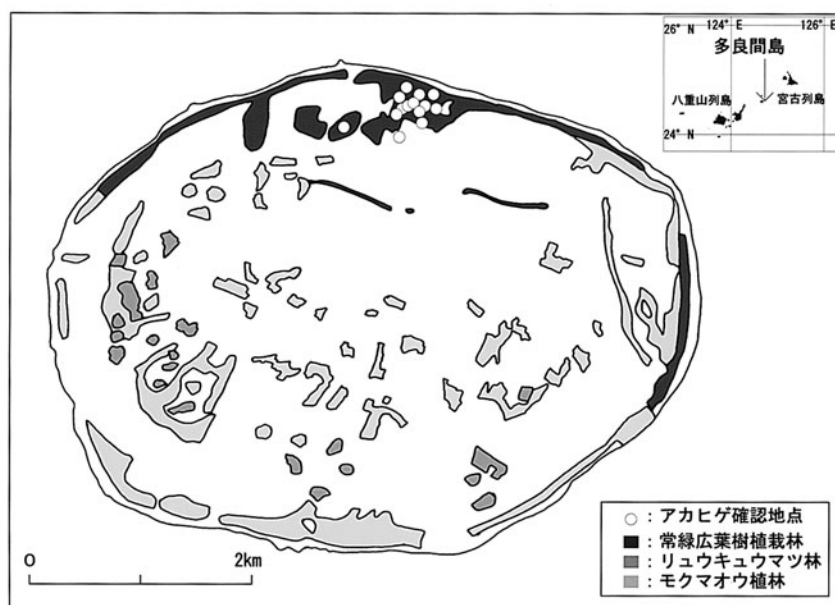


図-1. 多良間島における森林の分布とアカヒゲの確認地点。  
森林の分布は環境省自然環境情報 GIS による

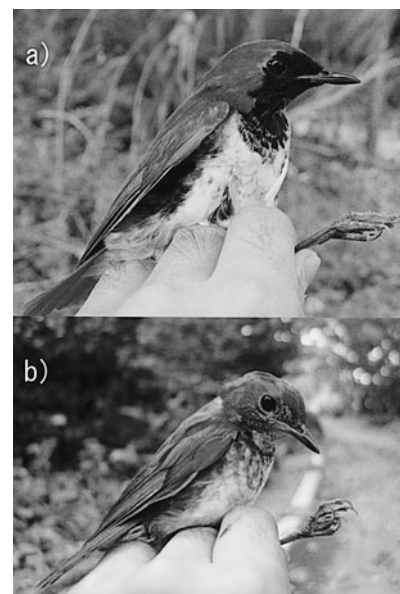


図-2. 多良間島で捕獲されたアカヒゲ。  
a) 雄成鳥, および b) 雌第1回冬羽

表-1. 多良間島で捕獲されたアカヒゲの各部計測値。値は平均±標準偏差 (mm)

	n	翼長	ふ蹠長	尾長	鼻孔嘴長	前額黒帯幅	翼差指数 (%)	備考
雄	5	74.1±1.1	28.7±0.9	47.4±2.9	9.8±0.7	3.2±1.3	20.7±1.0	うち4個体は第1回冬羽
雌	2	74.9±1.1	28.1±1.7	48.3±4.7	9.2±0.1	-	19.9±1.8	2個体とも第1回冬羽

(2003年10月29日 受付; 2003年12月15日 受理)

## 引用文献

- 環境省 (2002) 日本の絶滅の恐れのある野生生物 (2) 改訂版, 278pp, 自然環境研究センター, 東京.
- 川路則友・樋口広芳 (1989) 特殊鳥類調査報告書, 71-88, 環境庁, 東京.
- 久貝勝盛ほか (2000) 25周年記念誌, 8-17. 宮古野鳥の会, 沖縄.
- 永田尚志 (1999) 日本鳥学会誌 48: 83-100.
- 日本鳥学会 (2000) 日本鳥類目録改訂第6版, 202-203. 日本鳥学会, 帯広.
- 日本離島センター (1998) 日本の鳥ガイド, 1151pp, 日本離島センター, 東京.
- 関伸一 (2001) 森林防疫 50: 209-213.